毎日歌壇

伊藤 一彦 選

包帯のように毛布を巻きつける心がはみ出しそうな夜には　東京　石川　真琴

△評▽どんな心がはみ出しそうかと言えば、傷ついた心だ。「包帯」の比喩がそう思わせる。昼は耐えて頑張っているのだ。

一本の大樹を伐るは小宇宙ひとつ消滅させるに似たり　神戸市　中林　照朗

△評▽多くの鳥や虫や下草たちと永く生きてきた大樹はなるほど大なる「小宇宙」だ。

テント張り木陰選べば顔見せに毛虫団栗野良猫の来る　大和高田市　石塚智惠子

戦死でも事故死でもなく横たわる罪なき民の爆死理不尽　川西市　那須三千雄

世界史はハッピーエンド　国連のできたところで授業終えれば　静岡市　柴田　和彦

古希すぎて『憲法くん』を熱演す松元ヒロの汗にじむシャツ　札幌市　田巻　成男

一秒の狂ひもなくて正午指す秋陽冷やりと時計コーナー　霧島市　秋野　三歩

安売りの理由を知らぬ温玉の一回り小さく見える夜　横浜市　永永　キヌ

十人は十色で良いが百人も居れば半分は同じ色です　枚方市　久保　哲也

国産のオリーブ塩漬まろやかなみどりの贅を玩味してをり　横浜市　栗山マサ子

米川千嘉子 選

新人が何かするたびたたら踏むようにゆたかな風が吹き込む　千葉市　深海　泰史

△評▽職場でのことか。新人には失敗もあるが、それがやがて何かを生み出す。背「製鉄の炉に風を送りこんだのが蹈鞴だ。

その昔分限者の友は「ひもじいね」の輪の外にいて孤立していた　春日市　林田　久子

△評▽戦後の記憶か。「分限者」とはお金持ちのこと。時代を連れてくる言葉だ。

就活の風全身で受け止めてときどき枯れる声のはためき　つくば市　豊富　瑞歩

三本のみたらし団子をゆずりあう母子二人の夜は金色　碧南市　江原　冬莉

負けそうになれば子どもは泣きじゃくりダイブし暴れたかるたの上で　横浜市　友常　甘酢

叱られる時だけ呼ばれた記憶あり私は私の名前が嫌い　金沢市　竹内　一二

ガス室のバナナの熟度指先で読むは数秒息つぎならず　神奈川　岡本　一夫

桂の葉香りと共に文に添え心を晴らせの便りは友より　足利市　葛山満智子

手話の人のスポーツ大会ボッチャでは静かな中にも指はにぎやか　上越市　戸枝　誠

合併で干拓のむらの名は消えて稲穂の波うつ沃野が残る　新発田市　飯田　英範

加藤 治郎 選

死んだことのあるわたしはいないのに名古屋はいつ来ても天気雨　花巻市　永汐　れい

△評▽私の中にはいくつも人格がある。が、誰も死んだことはない。天気雨がきらめく。

モダン都市名古屋に奇妙な現実感がある。行く先を回転させたままのバスひざに完熟キウイをのせて　東京　富見井高志

△評▽行き先表示器がずっと回っている。行き先がないかのようだ。キウイが妖艶。

わたしなんか、わたしなんか、と言いながら愛されたくて買った冬服　所沢市　神田　望

青魚捌くその時に流れ出す魚が信じる神の讃美歌　横浜市　砂月　七

あの鳥は何鳥だろうひーこっくひーこっくぇーと鳴いているけど　横浜市　高橋　理恵

観覧車を少し見上げてあの時の約束、今も閉じ込めたまま　堺市　初夏みどり

探しても見つからぬまま先へゆく水槽にゐるはずのとび鯊　瑞穂市　渡部　芳郎

山羊や鳥がいる病院にやすむというあなたが癒えてくれますように　東京　倉下　柳

いいひとをやめたくなった夜に咲くツユクサのように内向きの息　札幌市　鈴木　精良

正、常、非、パート、バイト、派、はははははどれにもなれぬ無職が嗤う　ふじみ野市　雨雨雨汰

水原 紫苑 選

銃弾も炎も月には届かざり地球におりてここは月なり　京都市　小池ひろみ

△評▽世界の悲しみや苦しみを確かに知りながら、じかにふれることがない孤独と無力感は、月のとらわれ人ゆえ。

恒星って汚れたりするんだろうか森を駆け回った犬みたいに　横浜市　永永　キヌ

△評▽恒星を犬のようにとらえた生命感が魅力。星も汚れたいだろう。

風という言葉をしらぬ嬰児に草木はおどる千手観音　春日部市　宮代　康志

夜ということばを死語にするように銀杏黄葉は音立てて散る　浜松市　尾内甲太郎

紅茶色していた夕暮れ世界には路面電車が添い遂げている　枚方市　久保　哲也

生前は雪であったとふいに知るたわむれに鍵盤にふれれば　さいたま市　雨谷　詩穂

この星の複眼のごとむれむれとビニール傘がひらかれてゆく　東京　石川　真琴

夜のドレスコードのようにビル群はスパンコールを身に纏わせて　カナダ　よだか

肩が鳴る　かっくりかっくり肩が鳴りそのたびかるくゆれるたましい　東京　奥山いずみ

綱渡りの静寂満ちたクレーの絵　自由であるというさびしさよ　横浜市　砂月　七

投稿規定　はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100－8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム（https://mainichi.jp/kadan-haidan/）でも受け付けています。

他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句てふてふ」で公開します。

こちらから投稿できます